

令和 6 年度 教育子供委員会行政視察報告書

◎実施日：令和 6 年 5 月 9 日（木）～ 1 0 日（金）

◎参加者：村越 誠（委員長） 阿比留義顯（副委員長）

円谷 憲人 中島 俊 林 伸司 平野 光一

鈴木 清丞 末永 康文 渡辺 裕二

◎調査内容

実施日	視察先	視察項目
5 月 9 日	愛知県 一宮市	一宮市立中央図書館について

愛知県一宮市は，愛知県の北西部に位置し，古くから繊維産業を中心に発展してきた。人口は約 3 8 万人で県内でも有数規模の都市として知られており，令和 3 年 4 月には中核市に移行している。

今回視察した市立中央図書館は，平成 2 4 年に公共公益施設を主体とした「交流・文化拠点」として整備された「尾張一宮駅前ビル（愛称「iービル」）」の中に所在している。図書館エリアは 3 フロアにわたっており，5 階は児童と親子を対象とし，6 階と 7 階については一般利用者を対象としている。

同図書館は，市内の図書館ネットワークの中核拠点として，専門的資料や地域資料の提供，多様なメディアを利用した高度で専門的なサービスの提供により，利用者の多様なニーズに対応することに努めるとともに，駅前立地という特性を活かし，講座・講演会・展示会などを主催することで，にぎわいとふれあいの場，生涯学習の場としての機会を提供することを目指しているということが同市担当者より説明があった。

また，駅前という立地条件を活かし，広範な利用者を対象とした情報提供を行っており，中心市街地の活性化やにぎわいの創出に寄与しているということであった。

複合施設内に図書館を設置したことのメリットとしては，駅ビル



利用者や各施設訪問者との相互利用が期待できることが挙げられ、例えば、同施設の6階にはビジネス支援センターがあり、図書館の7階にはビジネス支援コーナーが設置されるなどの工夫がなされており、5階についても児童に特化したフロアにすることで、子供が安心して利用できるようにするとともに、同じ5階にある「中央子育て支援センター」との連携も図っているということであった。

利用者の利便性向上に向けた取組として、同図書館では、年に1回利用者アンケートを実施しており、「職員の対応」、「本の探しやすさ」、「調べ物の相談のしやすさ」などの満足度を調査しているが、「全体の満足度」として約60%の利用者が満足と回答しており、自由意見欄に書かれた様々な意見についても、可能な限り対応するよう努めているということであった。

現在認識している課題としては、一つ目に、同図書館が開館して11年が経過し、書庫がほぼ満杯の状態になってしまっているということが挙げられた。



さらに、一宮市には中央図書館のほかに3箇所の図書館、地域文化広場図書室、それに加え移動図書館があるが、中には築40年以上が経過し老朽化が進んでいる図書館もあるため、市内の図書館全体として、いかにサービスの水準を保ちつつ維持管理を見直していく

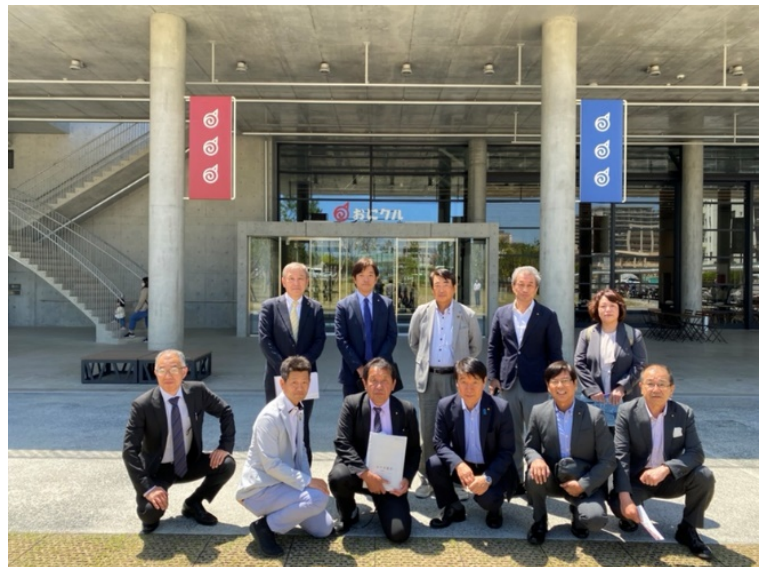
かが大きな課題であると認識しているとの説明があった。

今後は、利用者満足度の向上を図りつつ、施設の維持管理やサービスの充実を図るための施策を検討していくことで、市民の生涯学習や交流の場としての役割をさらに強化していきたいとのことであった。

実施日	視察先	視察項目
5月10日	大阪府 茨木市	茨木市文化・子育て複合施設おにクル (こども支援センター, こどもの広場, 一時保育) について

茨木市は、大阪府の北部に位置し、人口約28万6,000人、面積76.49平方キロメートルの都市である。ベッドタウンとして発展し、全国的に見ても比較的児童人口が多く、出生率も高いという特徴がある。

今回視察した「おにクル」は、総工費約165億円、ホールや図書館、子育て支援、市民活動センター、プラネタリウム等多くの機能が入る複合施設であり、100回以上のワークショップで施設内容を決定。「おにクル」の名称も一般公募で応募総数2,677件の中から当時6歳の男の子の案で決定し、「こわい鬼さんでも楽しそうであたくなっちゃうところ」という意味が込められている。施設オープンから1カ月で約20万人、5カ月で約80万人の来場者があったとのことで、現地視察した際にも遊びに来ている親子や自習をしている学生等多くの利用者でにぎわっていた。



施設の概要は、地上7階建て、延床面積19,715平方メートル、広場面積3,650平方メートル、主な施設機能として、大ホール、多目的ホール、多目的室、図書館（約10万冊）、市民活動センター、子育て支援、屋内遊び場、プラネタリウム等である。「日々何かが起こり、誰かと出会う」を設計コンセプトとしており、歩いて回ると効率が悪いと感じてしまうが、素通りして目的地に行くのではなく、それぞれ別の目的で来た人をつなぎ、人や機会の偶然の出会いが施設の中で起こるような設計となっている。

また、複合施設を造る場合、音の問題が発生するが、音を分断するのではなく、できるだけ融合させ、音、声、雰囲気をおの他のフロア

へ伝わるようにし，音や空気感でいろんな場所でいろんなことが起きているということを感じることができるようにしているとのことであった。

施設の運営については，指定管理者が3者，市の所管部署が3課，委託が1者と各スペースで管理者が分かれ複雑であるため，これを調整するために「おにクル会議」を月2回ほど開催している。



併せて，個別の施設に点在していた子育て支援事業，母子保健事業，子育て相談・虐待対応事業等をおにクル内の同じフロアに集約し，「妊娠・出産・子育て」に関する相談窓口の一本化の実現や，国の進めるこども家庭

センター機能の整備，おにクル内のさまざまな機能と連携し，健診に来た「ついで」，図書館に来た「ついで」，遊びに来た「ついで」に，気軽についでに相談できる環境の整備を行ったと説明があった。

今後は，こども家庭センター機能等のさらなる相談支援体制の充実と，まち全体で子育てを応援・支援する気運の醸成に取り組むとのことであった。また，おにクル運営のキーコンセプトは「育てる広場」としており，おにクルをどう使い，どう活動し，どう変えていくかは，市民自身の手により作り上げていくこととしていると説明があった。